保育者を目指す学生の学習場面における困り感について

学校適応感およびメンタルヘルスに及ぼす影響

○北見由奈（帝京短期大学）・五十嵐元子（帝京短期大学）・齊藤　崇（淑徳大学）

キーワード：困り感，保育者養成，学校適応感，メンタルヘルス

目　的

近年，高等教育機関における学生支援は，発達障害もしくはその傾向がある学生の修学に関する困難さと，そこから発生する二次障害（学校不適応・メンタルヘルスの不具合）の両方を視野に入れた具体的な困難への対応と心理的側面での支援が求められている（日本学生支援機構，2014）。北見・五十嵐・齊藤（2017）は，保育者を目指す短期大学生が学習場面において「日誌やレポートを書くときに，どう文章を作って良いのかが分からない」，「話を聞きながら，メモを取り切れない」などの困難さを抱えていることを報告している。これらの課題は，SLD や AD/HD の特徴と重なる部分が多く，実習指導・学生指導を実施する際には，特別なニーズに応じた心理的支援の必要性を考慮することが求められる。

そこで本研究は，北見ら（2017）により抽出された保育者を目指す学生が学習場面で抱える困り感および困り具合に関するセルフチェックリスト（日本学生支援機構，2007）を参考に教育・保育実習指導における困り感に関するチェックリストを開発し，学校適応感およびメンタルヘルスに及ぼす影響について検証することを目的とした。

方　法

【調査時期と対象】2017 年 6 月中旬に首都圏および近郊に位置する大学および短期大学の保育者養成課程に在籍する学生 157 名（男性 14 名，女性 143 名，平均年齢 19.10 歳，SD=1.15）を対象に質問紙調査を実施した。

【調査内容】1）基本的属性（性別，年齢），2）教育・保育実習指導における困り感（本研究により作成），3）学校適応感（北見・山内・清水，2015），4）日本版 GHQ28 項目短縮版（中川・大坊，1996）について回答を求めた。

【倫理的配慮】1）本研究への協力は任意であり，回答を拒否しても一切の不利益を被ることがないこと，2）回答を途中で中止する権利があること，3）回答は成績評価に影響しないこと，4）データは統計的に処理され，研究以外には一切使用しないことを文書および口頭での説明を行った上で，同意が得られた者のみを調査対象とした。

【分析方法】1）教育・保育実習指導における困り感に関するチェックリスト（原案）に対し，探索的因子分析（最尤法・Promax 回転）を実施した。2）教育・保育実習指導における困り感に関するチェックリスト，学校適応感尺度，GHQ-28 における各因子得点を算出した。3）教育・保育実習指導における困り感に関するチェックリストの各因子得点を独立変数，学校適応感尺度および GHQ-28 における各因子得点を従属変数とし，強制投入法による重回帰分析を実施した。

【利益相反開示】発表に関連し，開示すべき利益相反関係にある企業などはない。

結　果

1. 教育・保育実習指導における困り感に関するチェックリストの開発

教育・保育実習指導における困り感に関するチェックリスト（原案）を作成し，探索的因子分析を実施した結果，最終的に解釈可能な 4 因子 18 項目が抽出された（α=.701―.856）。なお，第 1 因子は『物忘れ』，第 2 因子は『文章構成』，第 3 因子は『文章理解』，第 4 因子は『抑うつ傾向』と命名した。

2. 学校適応感およびメンタルヘルスに及ぼす影響

1）学校適応感に及ぼす影響

分析の結果，「教員との関係性」において決定係数は有意であり，「授業への参加」，「友人との関係性」においては有意な傾向を示した。また「抑うつ傾向」得点から「友人との関係性」得点，「教員との関係性」得点への標準化偏回帰係数が有意であった（β=-.234, p<.01；β=-.245, p<.01）。

2）メンタルヘルスに及ぼす影響

分析の結果，すべての従属変数において，決定係数は有意であり，「物忘れ」得点から「不安と不眠」得点，「うつ傾向」得点への標準化偏回帰係数は有意であった（β=.176, p<.05；β=.139, p<.01）。さらに「抑うつ傾向」得点から「身体的症状」得点，「不安と不眠」得点，「社会的活動障害」得点，「うつ傾向」得点への標準化偏回帰係数が有意であった（β=.393, p<.001；β=.499, p<.001；β=.462, p<.001；β=.540, p<.001）。

考　察

研究の結果，教育・保育実習指導における困り感として『物忘れ』，『文章構成』，『文章理解』，『抑うつ傾向』が抽出された。保育者を目指す学生にとって，実習日誌や指導案を書くこと，他者と効果的なコミュニケーションをとることは避けられないものであり，学生生活をとおして改善していくことが求められる。現代の若者は，短い文章や話し言葉でのやり取に慣れており，日誌にかかわらず書く作業自体に苦痛を感じていることが推察される。また，抑うつ傾向の高さは，友人や教員との関係性の悪化に影響を及ぼし，物忘れの多さは不安や不眠，うつ傾向を増大させることが明らかとなった。さらに抑うつ傾向の高さは，精神的健康状態を悪化させ，頭痛や不眠，イライラ感，不安感，社会的活動の抑制などの様々な症状を引き起こす原因になることが示された。学生は，教育・保育実習指導において様々な困り感を抱えていることから，それらを上手く対処するスキルが身につけられるような教育的支援が求められる。

【付記】本研究は，全国保育士養成協議会による平成 28 年度ブロック研究助成を受けて実施された。

(KITAMI Yuina, IGARASHI Motoko, SAITO Takashi)